



ゲルマニスティネンの会 主催

ドイツ語文芸翻訳ワークショップ^o 2023

素晴らしい原作を翻訳して多くの人に読んでもらいたい。けれど、実際に翻訳をするとなるとなかなか難しい…そう悩むことも多いかと思います。

そこでゲルマニスティネンの会会員で、翻訳作品を精力的に出版されている鈴木芳子さんと小川さくえさんを講師として、翻訳の実際を学ぶワークショップを開催します。ドイツ語の文芸翻訳に興味のある方であれば、どなたでも参加できます。

日時：2023年3月12日（日）13時～15時30分

ZOOMにて開催（ZOOMのURLはお申し込み後に連絡いたします。）

ワークショップ^o① 講師：鈴木芳子 テーマ：KUNST UND LIEBE

原作のもつ味わいをできるかぎり再現し、読者がより深く理解し、より楽しめる翻訳にするには？オペレッタの歌詞でウォーミングアップした後、E.T.A.ホフマンの小説『牡猫ムルの人生観』の「芸術と愛」について述べたシーンを題材に、的確な訳語を探る手立てを具体的にみていきます。

講師プロフィール：翻訳家。訳書にゲーテ『イタリア紀行』、ショーペンハウアー『読書について』『幸福について』（いずれも光文社古典新訳文庫）、ヒュルゼンベック編著『ダダ大全』、ローゼンランツ『醜の美学』（いずれも未知谷）他多数。

共著に『私が本からもらったもの—翻訳者の読書論』（書肆侃々房）。

カール・アインシュタイン『ベビュカン』（未知谷）でM・ダウテンダイ（独日翻訳）賞受賞。

ワークショップ^o② 講師：小川さくえ テーマ：文学作品の翻訳者は「第二の作家」

文学作品の原作と翻訳作品は別物—この前提に立てば、翻訳作業が、新たな作品の創造に匹敵する仕事であるという自覚が持てます。文学作品の翻訳者は、いわば「第二の作家」です。

ドイツ語に翻訳された日本の文学作品を、日本語へ再翻訳する作業を通して、翻訳者の主体的な判断や解釈が、翻訳に決定的な役割を演じていることを明らかにしていきます。

講師プロフィール：宮崎大学名誉教授。著書に『オリエンタリズムとジェンダー—「蝶々夫人」の系譜』（法政大学出版局）。

訳書にD. デリエ『奇跡にそと手を伸ばす』（鳥影社）『サンサーラ』（同学社）、W. シヴェルプシュ『光と影のドラマトゥルギー』、C. V. リンネ『神罰』、W. レベニース『十八世紀の文人科学者たち』（いずれも法政大学出版局）他。

お申し込みは 横山（workshop2023@germanistinnen.sakura.ne.jp）まで。3月8日締切。